



明治中期までの綿屋彦九郎家年表

世の中の流れ	元号	西暦	加賀藩主	綿屋の歴史
	天正2年	1574		二代彦六郎が能登和田野に移住する
	天正14年	1586		越中砺波郡坪内庄宮村から放生津に移り町人となり茅店を開く
江戸幕府開府	慶長8年	1603	利長	
	慶長9年	1604		三代彦五郎が放生津奈古浦で町人になる
台網（定置網漁）灘浦で始まる？	元和7年	1621	利常	
加賀藩米輸送の下関試送を行う	寛永16年	1639		
瑞龍寺起工	正保2年	1645	光高	
加賀藩、伏木湊の調査	正保4年	1647	綱紀	
放生津新町ができる	慶安2年	1649		
加賀藩他国米の移入を監視するため澗改人を湊に置く	承応2年	1653		
吉久と伏木に御蔵が出来る	明暦1年	1655		
加賀藩渡海船商売を規制	寛文2年	1662		
高岡綿場設置	寛文12年	1672		
不作、凶作が続く。新田開発を進める	延宝1年	1673 ～		
富山藩、岩瀬で御用船建造	延宝7年	1679		
松尾芭蕉が放生津に入る	元禄2年	1689		
幕府が飛騨を天領とする	元禄5年	1692		
富山藩、松前への渡航を企て調査を始める	元禄7年	1694		
加賀藩、米輸送を全て上方船に任せることを決め地元と対立	元禄12年	1699		
	宝永5年	1708		彦三郎が砺波郡宮村から放生津に引っ越す
大不漁	享保1年	1716		
竹脇茂三郎が久々江野の新開工事を譲り受ける	享保10年	1725	吉徳	
西国大凶作、米価高騰	享保17年	1732		
加賀藩、渡海船出入港をそれまでの木町から伏木とする	延享1年	1744		
儉約令	宝暦1年	1751	重熙	
高岡綿場公営となる	明和1年	1764	重教	
放生津潟にガメ社（海竜社）が建立される	明和4年	1767		
近江商人以外の他国商人の入国禁止策	明和8年	1771	治脩	
富山藩校広徳館開設	安永2年	1773		
金沢の木屋孫太郎が商工業を奨励し交易を活発にすることを説く	安永4年	1775		
加賀藩、米輸送の上方依存から脱却するため千石積船の建立を許可	安永5年	1776		
大凶作、疫病流行	天明3年	1783		
加賀藩、財政整理、物価対策に乗り出す	天明5年	1785		
加賀藩校明倫館設立	寛政4年	1792		
	寛政6年	1794		苗字帯刀仰付願
高田屋嘉兵衛、幕府の北方政策により択捉航路や漁場開発を行う	寛政12年	1800		
	享和2年	1802	斉広	放生津新町に移り廻船業を始める
伊能忠敬、測量の為放生津柴屋彦兵衛宅に宿泊	享和3年	1803		
魚津の四十物屋孫助、蝦夷航路を開く	文化2年	1805		
幕府よりロシア船に備えよとの命が下る	文化3年	1806		
古新町で大火が起こる	文化4年	1807		
火消射水七組制度ができる				
金沢城二の丸焼失	文化5年	1808		
加賀藩渡海船建造奨励				
石黒信由加賀藩の命により三州の測量を行う	文化7年	1810		
	文化8年	1811		8代、金龍院（加賀前田家12代藩主斉広）に謁見
グローニン事件	文化9年	1812		
加賀藩、改作法復活				
放生津大火				
	文化10年	1813		8代、放生津新町組合頭となる
加賀藩浦口銭を品目別に統一	文政1年	1818		8代、加賀藩の御用米輸送を任される
	文政3年	1820		8代、算用関役となる